



スカウティング茨城



ボイスカウト茨城県連盟
広報専門委員会 編集発行
<http://www.d2.dion.ne.jp/~bs18raki/>

21世紀あめでとう!!

新世紀突入＆県連50周年記念年出発号



みなさん、あけましてあめでとうございます。

遂に21世紀がやってきました。このようなチャンスに生まれたことを感謝するとともに、今まで培ってきたいろいろなことを礎に、これから的人生、社会、地球環境等についてしっかりとと考え、それをひとつひとつ実践して成果を上げていきたいのですね。創始者であるベーデン・パウエルは、スカウティングの教育の在り方について一言でこう言っています「Learning by Doing(実行によって学べ)」そしてその方法は「Play The Game(スカウトたちにとって楽しいゲームである)」と。

さて、これまでボイスカウトの世界機構や日本連盟では「21世紀を担う青少年の育成のため」に向けたさまざまな取り組みをしてきました。第34回世界スカウト会議(1966年)のテーマ「Looking Wider～視野をより広く」は、21世紀を目前にしてスカウト運動で直面する数々の問題点に対応していくために、この運動に携わるすべての成人が「誰のためのスカウティングか?」「何のためのスカウティングか?」を真剣に考え、改革を推進することを再確認したものです。

スカウト運動は、青少年の、青少年による、青少年のための運動であるはずですが、現在世界のスカウト運動は、本当の意味で青少年が主体となる運動になっているのでしょうか? 青少年がこの運動の意志決定に関わっているのでしょうか? 青少年に興味のあるプログラムが提供されているのでしょうか? この運動に携わるすべての成人が、この運動にどの様に関わるべきか、成人をどのように活用し管理するべきか「スカウティングにおける成人(Adults in Scouting)」を根本的に見直そうという、スカウト運動の生き残りをかけた提案が世界スカウト機構の教育グループ委員

長ベルティル・トウニエ氏からなされたのは今から11年前のことでした。それは……各階層組織に広がった大組織病と官僚主義を廃し、長い歴史の間に出来上がった悪い習慣を無くし、一般社会から若くて有能で意欲的な成人の人材が適材適所に活用でき、常に組織の活性化を進めなければ、今後ともスカウト運動は衰退し続け、もはやスカウト運動に21世紀はない……との警告でした。

それを受けた今、日本連盟から順に組織改革・機構改革が行われています。これからは県連盟、地区、団組織への改革が行われていきます。がしかし、教育は大人から子供へという既成概念、また日本の土壤にそぐわないという抵抗感や昔ながらの価値観の台頭、痛みを伴うことへのとまどいや反発等からなかなか進んでいないのが現状ではないでしょうか?

折しも、核家族化、少子化による子どもへの過保護や過干渉の傾向が顕著となった昨今、社会においても様々な問題提起がなされています。それに対し21世紀を担う青少年の育成に向けて「自分で判断し、実行し、そして責任を持つ人間として成長する」ことを期待して、ゆとりの中で「生き

る力を育む」ことが重要であるとして、教育界にとどまらず、広い取り組みがなされています。その基調をなすのが「子ども最優先」の考え方です。

21世紀になった今、青少年の育成に関わる者として「子ども最優先」の視点の中で、「青少年の、青少年による、青少年のための運動であるはずのスカウト運動」において「子どもの参画」をどのように受け止め、考えていくのかを私たち成人指導者1人ひとりが真剣にかつ前向きに受け止め、それを実現できる組織作りを青少年と共に私たち自らが作り上げていくことが早急に求められているのです。



平成12年度茨城県連盟理事会メンバーの皆さん

50周年を迎えて

ボーイスカウト茨城県連盟

連盟長 関 正夫

21世紀の初頭を皆様とともに迎えることができ、あめでとうございます。

さて、茨城県連盟がこの新世紀の初年度に発足50周年を迎えて、皆様とともに記念の諸行事を計画できることは、誠に光栄であり、意義の深いことあります。

私どもは、この50周年間に多くの先輩が築かれた、茨城県連盟のスカウト運動に、深甚なる敬意と感謝を申し上げるとともに、新しい世紀に受け継ぎ、青少年の健全育成に努力せねばならぬ責務を痛感いたします。

20世紀の初めに、創始者ベーデン・パウエル卿によって発足したこの運動が、戦争という激動の中でも、常に教育の場を自然に求め、その中で青少年が自らの力で、世のため人のために奉仕できる心と体を養い、世界平和に貢献するとい

う基本原理は、脈々として生きて、この運動100年の歴史が築かれたと信じます。そして21世紀になっても、私どもが受け継ぎ、進展させなければならない責務があると思います。

前世紀は一面、科学の急速な発展により、私たちの生活も大きく変化してまいりましたが、その中で生きる青少年も環境の変化により、必ずしも健全なる発達を遂げたとはいわれません。

私は、この節目に当たり、皆様とともにスカウティングの原点を再確認して、スカウティング人口の躍進を図ることが急務と考えます。

皆さん、スカウト運動は、決して難しい運動ではないと思います。青少年が自己の責任と自覚に目覚め、他を思いやり、楽しい野外活動を友達と展開し、いつでもどこでも他に奉仕できる心と体を養い、家庭・地域社会・国そして地球のために役立つ人間になることだと思います。

県内の指導者・スカウトの皆さん、この2001年が新世紀の出発点であり、力強く実践すべき時期と信じます。県連盟は、その出発の記念すべき50周年を実りあるものにすることと思います。皆さんで力を合わせて頑張りましょう。

●茨城県連盟創立50周年記念特集 茨城県連盟の諸先輩方のことば ~第2回~

指導者の皆さんに

第5代副連盟長

成瀬 孟男

「人格」とは、具体的な人間関係のかかわりの中で形成されるとされます。子供と一緒にその全人格を知ろうとつとめる「マン・ツー・マン」の教育こそ大切であり、スカウトのキャンプはまさに理想の「教育」と言えると信じます。テントを「塾舎」とし隊長が「塾長」となって、昭和の松下塾の気概で、学校の教室に勝る教育を展開しましょう。

苦労にたえる「我慢強さ」を通して「やればできる」という気持ち、共同生活の中から、自分の主体性を見出し、自分の存在・在り方を知らせてやること等、忘れてはならないことです。そして、彼らに感銘を与える生活、つまりスカウト精神を残してやりましょう。

★ ★ ★

はきだめに エンドウ豆咲き

どろ沼に 蓮の花咲く

人みな 美しき種子あり

あす 何の華が咲くか

という詩があります。「どんな者」でも、「良いもの」があるはずで、それを育ててやらなければなりません。そのためには、子供と同じ立場に立ち、聞き役になり、ほめ役にならなければなりません。

★ ★ ★

有名な、クラーク博士の「少年よ大志を抱け」の言葉に続いて、次の言葉があることは余り知られていません。

「それは、金銭や我欲のためではなく、また、人呼んで名声という空しいもののためであってもならない。人間として当然備えていかなければならないあらゆることを成し遂げるための大志を持て!」

さあ、スカウト達は待っています。

【1985年11月17日講演会にて】

B-Pの言葉



いい隊長になりたいなら、少年の心を持つ大人(boy-man)になりさえすればよい。

すなわち

- 1)少年の心を持ち、先ず最初に少年たちと同じ立場に自分を置くことができないといけない。
- 2)少年期の年齢に応じた欲求、未来を見通す力、願望を知つておくこと。
- 3)集団として少年を扱うのではなく、個人として少年を扱うこと。
- 4)そして、最高の結果を得るために、個人の中に協力の精神を養う必要がある。

平成13年を迎えて

ボーイスカウト茨城県連盟

理事長 佐野 英樹

新しい世紀の幕開けの年を迎えました。

地区や団(隊)では、新年にふさわしい行事が展開され、新たな気持ちで将来の希望を語り合ったことだと思います。

今年は、わが茨城県連盟として結成50周年を迎える記念すべき年であることは皆さんご承知のことあります。今年は50周年のメモリアル・イヤーとして、1年間を通して記念行事を考えてあり、まもなく細部について皆様にご案内することになってあります。特に、8月には第15回茨城県キャンポリーを記念大会として開催することに決定しています。その他、県内一周リレー、記念誌発行、祝賀会等の行事を計画しております。

今回の記念行事がスカウトのみでなく、関係者すべての心に残り、スカウト運動の発展普及につながり、広く社会の人々から一層の理解や協力、支援が得られるようにと願って

ありますので、各行事の成功を期し県内各団のスカウトの皆様の絶大なご協力とご支援をお願いします。

また、新世紀初頭には、日本連盟創立80周年(平成14年)、世界スカウト運動100周年(平成19年)、ムート2001(平成13年)、第13回日本ジャンボリー(平成14年)、第20回世界ジャンボリー(タイ:平成13~14年)等々が既に公表されており、国際的な活動参加の機会が提供されます。

スカウト人口の減少、活動のマンネリ化、プログラムの開発、人材の確保、財源の問題等スカウト運動には山積みする課題がたくさんありますが、情熱に満ちた皆さん方の奉仕と地域に根付いた地道な活動こそが、課題解決に向けての第一歩ではないかと思います。

今年も皆様のご活躍とご健勝、スカウト運動の充実を祈念いたします。



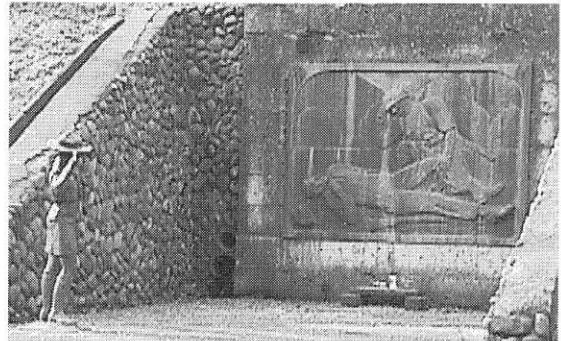
◆心に残るスカウトのお話 その3

アンノウン・ソルジャー (無名戦士の物語)

太平洋戦争の末期、南洋の島々で日米両軍の死闘がくりかえされていたころ、南洋のある島に出征したソルトレーク市出身のアメリカ兵が、日本軍と戦闘を交えたさい、負傷して気を失い倒れてしまった。気がついたとき、友軍は引揚げたあとで、周囲にはだれもいなかつた。そのとき、銃剣を手に恐ろしい形相で突撃してくる日本兵の姿が目に映った。銃剣がのどもとに迫るのを見たとき、そのアメリカ兵はふたたび気が遠くなつたが、その瞬間、彼は幼いときからボーイスカウトにはいっていたので、無意識のうちにボーイスカウトの敬礼……三指礼をしていた。

しばらくして、ふと気がついた。だれもいなかつた。起きあがってあたりを見回すと、かたわらの木の小枝にぶら下がっている小さな紙片が目についた。ひろげてみると、英語でつぎのように書いてあった。
「自分もかつてはボーイスカウトだった。ボーイスカウトは世界の人すべてが兄弟だ。3つの誓いをあらわす“三本指”を見てスカウトとしての気持ちがよみがえり、兄弟であり傷ついているきみを殺すことができなかつた。手当をしておいた。1日も早く回復してほしい Good luck !!」

のち、負傷したこのアメリカ兵は本国に送還された。この話を聞いたそのアメリカ兵の父親は非常に感激し、これこそ真の兄弟愛であると、ボーイスカウトアメリカ連盟の事務局長シャック博士に伝え、これが1952(昭和27)年4月19日、ソル



トレード市で開かれたアメリカ第7地区のボーイスカウト年次総会の席上、同博士から発表されたのである。その後、この話はアメリカのボーイスカウトの雑誌『スカウティング』『ボーイズ・ライフ』や新聞にも報道されて反響をよんだ。戦場でアメリカ兵の命を助けたこの日本兵は、おそらく戦死したのではないかと思われているが……。

アメリカにおけるボーイスカウト運動の起りは、名の知らない1人のイギリスのスカウトの善行からであったが。日本にも、同じような美しい話があったのである。ボーイスカウト精神をあらわす“三本指”から生まれた元日本兵とアメリカ兵のこの秘話は、ボーイスカウトアメリカ連盟本部から日本に派遣されたフィンネル博士によって明らかにされ、日本の新聞にも報道されて波紋を投げた。

のち、この波紋は日本中のスカウトの募金運動にまで発展し、久留島秀三郎らが中心になって、無名のスカウト戦士の記念像が「子供の国(神奈川県)」にできあがつた。

★ HELLO IB_{AR}

地区だより
KI

このコーナー「ハロー、アイビー」は、各地区的通信員(地区記者)等からの情報で構成しています。地区も団も隊も、スクウト活動すべてが取材の対象だよ。

★FROM DISTRICT PRESS ★FROM DISTRICT PRESS ★FROM DISTRICT PRESS ★FROM DISTRICT PRESS ★FROM DISTRICT PRESS

第1回 第7地区スカウト祭

平成12年11月19日(日)に念願の第一回スカウト祭を 水海道青少年の家で行いました。ボーイスカウト・保護者・リーダー そしてガールスカウトを招待し 総勢343人が参加してくれました。秋空のもと「大きくなれ スカウトの輪」を テーマに、地区内の活性化を図る目的で、ゲームや模擬店での食事を楽しみました。

ゲームは、さかななり・我はフクロウ・風船バレー・ヒットペットなど全部で10種類。スカウト達は、広いグランドをも

いっきり走り回って
いました。

お腹がすくと模擬店へ直行！ まずは、うどん・じゃがバター・ませごはんで腹を満たし、仕上げはホットケーキ・わら菓子、最後に口の回りを真っ黒にしながらチョコいていました。



第二回スカウト祭は、三和で行うこと
を約束して解散しました。（藤田）

土浦市市政施行60周年記念行事 「福祉スポーツ大会」

土浦第3団力ブ隊 奉仕

平成12年9月24日(日)、土浦市の霞ヶ浦文化体育館で障害者(児)スポーツ大会が盛大に開催されました。

これは、土浦市に住む障害を持つ方々が一堂に集まって、スポーツの秋を楽しむものです。

午前9時30分、開会式に土浦第3回力
ブ隊のスカウトたちは、車椅子を先頭に
視覚障害者、心身障害者、聴覚障害者選
手たちのプラカードを持って入場行進
しました。

開会宣言のあと、土浦市長の挨拶で

は、選手や関係者たちに対し暖かい励ましの言葉がありました。

競技中カブたちは選手に手を添えたり、車椅子を押してあげたり、選手たちの手伝いをしました。競技が無事に終わったときカブたちはとても勉強になつたと感激していました。

こうして一緒にスポーツを楽しむことで、正しい理解と認識が高められていくものと思います。（大森）

第1回 「野宮法」実技研究会

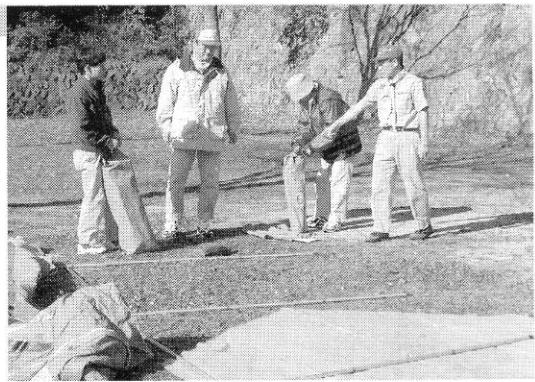
12月2～3日に日立市あかさわ山荘に泊り、もとやまキャンプ場で「野営法」を課題として実技研究会を行いました。地区コミッショナーグループと指導者養成委員会主催の研究会は、快晴で完全な冬型天候で紅葉の残る自然環境の穂やかな日差しの中で行い、予定研究内容を全て修了しました。

プログラムはビギナー・レギュラーの2コースで、テントサイト(サイト計画と家型テント設営)・縛材法・野外工コ料理・手旗を主な実技とし、石本主任講師

と県連トレーニングチーム要員と
地区コミグループに指導スタッフ
の奉仕をいただきました。

参加者は夫々のコースで実技と評価・反省に加えてスタッフの失敗談をまじえた経験ノウハウに聞き入って楽しく和やかな研究会になりました。

夜のセッションでは、ソングと「キャンプの衛生」「スカウティングと環境」について真剣に議論を交わしました。特に実技には「環境にやさしいキヤ



ンプ」が考慮されていたので現実的な討議が弾み好評でした。（小林）



10月19日～24日の6日間、ボーイスカウトのアジア太平洋地域が主催する多目的ワークショップが国立オリンピック青少年総合センターで開催されました。参加者は7ヶ国から30人、うち日本からは16人で、当県の吉川勲県副コミッショナーはその1人です。



アジア太平洋地域 多目的ワークショップ開催

ワークショップの中で活発に議論されていましたことは、スカウト活動には楽しいプログラム設計が必須条件であり、それには青少年がそのプログラムを自己開発し、設計に主役として参加することが必要不可欠であること。またアダルト・リソーシスの面では、成人はこの運動に関わることで「成長」がもたらせられること、責務を果たすには知識・技能・姿勢・時間の4つがキーワードになっていることです。

20日～21日には同会場別室で、アダルトリソーシスとユースプログラムに重

点をおいた「全国指導者のためのシンポジウム」が開催され、国内から約80名(茨城からは八木県国際委員長、中島県指導者養成副委員長の2名)が参加しました。これもワークショップと同じ講師陣が担当され、直接世界の風を感じ吸収することができ、自分の中のスカウティングが広がる思いがし、たいへん有益でした。

また、茨城からはローバースカウトが1名自主的に奉仕を買って出て運営に協力していました。大きな収穫と成長があつたようです。
(中島)



第1地区

第18回スカウトフェスティバル

11月19日(日)第18回スカウトフェスティバルを日立市もとやまキャンプ場で行いました。テーマ「みのりの秋に感謝して未来へ飛翔!」にふさわしく紅葉が紺碧の空に映える中で、テーマの呼びかけ「収穫を終え紅葉を迎えた大自然の恵みに感謝して21世紀に向けて力強くはばたこう」に応えて、参加者全員が晩秋の1日を和気あいあい楽しいフェスティバルになりました。

ビーバーからベンチャースカウト、ガールスカウトの友達も加わり約300名が、各団提供の行事プログラムに参加し

て楽しさの中にもスカウト技能を体験してもらいました。プログラムは進級課目やチャレンジ章などビーバー、カブ、ボーイ、ベンチャー各スカウトの進歩の手助けになる内容を織り込んださまざまな楽しいプログラムにサイトは盛り上がり、地区内の

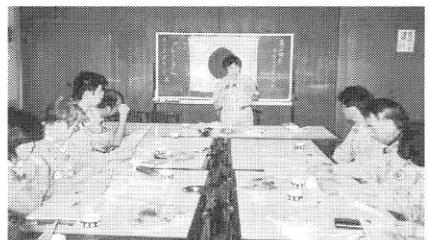
親睦と友情を深める1日になりました。
(小林)



土浦7団では、10月22日に土浦市産業祭の一環として実施された「緑の募金」に協力しました。



10月22日、水戸第1団の発団50周年記念式典が、多くの来賓・OB・友好団等の出席を得て盛大に挙行されました。



11月18日に第3地区ラウンドテーブルが開催され、カブ・ボーイのプログラム研究が行われました。



ひたちなか第2団では、11月5日に発団20周年記念筑波山登山を行いました。(10周年は富士山登山でした。)



12月10日に県連トレーニングチーム研究集会が開催され、来年に向けて訓練プログラムの研究が行われました。



11月19日に第294回指導者講習会(主任講師石塚正夫氏)が県立青少年会館において実施されました。



みなさん冬のスカウティングで真っ先に思い出されるのは何ですか？ベンチャーやローバーになると真っ先に出てくるのが、雪の中のキャンプ、そう「雪中キャンプ」なのです。「わざわざ寒い雪の中でキャンプなんかしなくても…」と言う人もいるでしょうが、1度やってみると、なかなかかどうして結構病みつきになってしまうのです。みなさんの団にも雪中キャンプフリークがいたりしますよ。そこで、今回は雪中キャンプについて紹介していきましょう。

さて、雪中キャンプは寒いと容易に想像できると思います。そうなんです、寒いんです。そのため、みんなが普段行っているキャンプよりもしっかりと準備(計画、服装、装備、ルール等)をしなくてはなりません。そして雪に対するしっかりとした知識と技能を持ったリーダーの下で実施するのであれば、ちょっとした工夫で、とても快適なキャンプ生活があられるハズです。



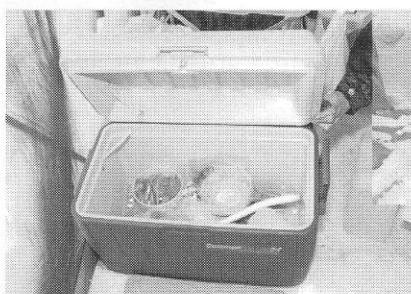
▲ キャンプサイトは民家やゲレンデの周辺がいいですね。荷物の運搬はスノーボート+ゴムバンドがベストです。個人装備&グループ装備は、けっこうな量になります。荷物は直あきして濡らさないこと(ブルーシートの上に置く)。夜になると凍ってしまいます。



▲ 雪にはふつうのペグは効きません。すぐぬけてしまいます。また雪に埋もれてなくなったりしますので、竹の板を十文字に結んだ「十字ペグ」を使います。穴は20cmほど深さに掘ってペグを入れ雪をかぶせます。食堂フライ等を建てるときに役立ちます。ちなみにこの隊ではスクリーンテントを食堂に使っていました。またペグには直接親綱は結ばず間にS字金具を使った方がいいです。



▲ 設営場所が決まったら、みんなで肩を組んで「ツセツセ」と整地です。しっかりと固めないと寝たとき背中とお尻の部分が沈みます。歌を歌いながらだと楽しくできます。テントの大きさ+周囲1mほど踏み固めましょう。



にツルツルになるので毎日耕そう。凍らせたくないものはクーラーボックスに。凍ってもいいものは掘って作った冷蔵庫に。炊事の火はガソリンコンロが一番。また、手を濡らさないように作業には手袋を使うこと。スキー用は行動用に、炊事には軍手+作業用ゴム手かな。手袋も極力濡らさないように。衣服もそうですが、肌に直接接するものは、極力濡らさないということを心がけてください。濡れたまま着ていいように。ところでメニューは「万年鍋」でしょう。

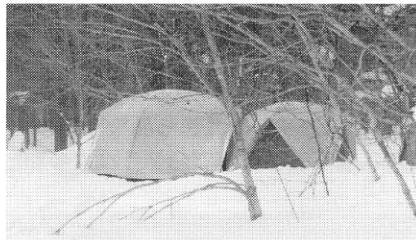
冬キャンプのすすめ

まず、雪中キャンプで大切なルールをいくつかあげてみましょう。それは…

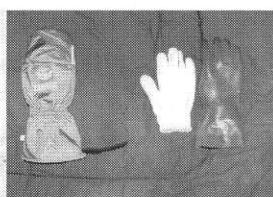
- ①自然を傷めない(十分な準備と対応措置を考える)
- ②寒く不便な生活を楽しむ(いろんな工夫をしてみる)
- ③整理整頓はきっちりと(雪に埋もれるとなくなる)
- ④体を冷やさない(汗対策と衣服による調整)
- ⑤決めたルールは必ず守る

…等です。特に特別なことを言っている訳じゃないよね、ボイスカウトとしてごくあたりまえのこと。雪中キャンプは、それをよりしっかりと各自が自覚して実行することが大切なのです。

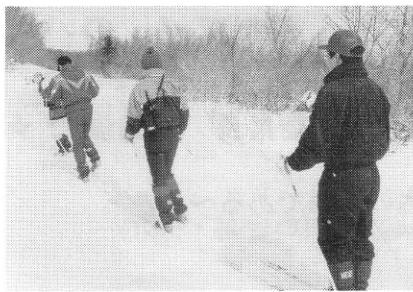
それでは、ベンチャースカウトたちの雪中キャンプの様子を見ていきましょう。【雪中キャンプのやり方はいろいろあります。ここではその1例として掲載しました。みなさんもいろいろと工夫して実施してみてください】



▲ テントを張ります。ドームテントがいいですね、雪下ろしをまめに行なうならば特に雪用の必要はないでしょう(A型テントはすすめません)。風よけにテントの周囲に雪のブロックで、風よけの壁を作るといいですね。ブロックはコンテナボックスで作ってます。



▲ 次は大切な食事関係です。机と椅子は雪を掘って簡単に作れます。お尻の下にはバスマットを1/4に切ったもの敷きます。足下は使っているうち



▲ 雪の中のアクティビティはいろいろあります。クロスカントリースキーで雪原の散歩もいいですね。ウサギの足跡を追ったりバードウォッキングをしたり。昼ごはんと暖かいお茶を持って出かけましょう。天候には十分注意しましょう。

▲ 積雪の多い場合や吹き溜まりを利用して雪洞を掘ってみるのも楽しいですね。スコップと青シートが役立ちます。ロウソク1本の明かりでとても明るく、結構暖かくなります。七輪で焼き物もいいですね。でも酸欠には注意、換気はまめに。

▲ そしてワカサギの穴釣り。釣れればおがくになります。テントを使わない場合は、防寒防風対策はしっかりと。他にカラーポールを使った雪上ゴルフや雪上野球、班対抗雪合戦、ビニパンボブスレー、スノーボート犬ぞりレース等いろいろなゲームを考えましょう。

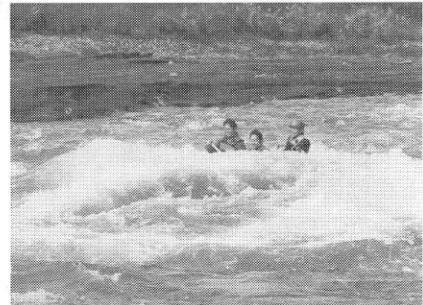
●来るなら来い(くるこい) チャレンジャー報告 2000年秋・晚秋カヌー・川下り編

スカウティング茨城編集部がベンチャースカウトを応募して、とあるアクティビティに派遣しチャレンジ・レポートをしてもらう「来るなら来い(通称くるこい)」の第1回目は、12月も直前の晚秋に行われた那珂川カヌー川下りであった。

今回のチャレンジャーは、本来女子スカウトのハズだったが、とあるカヌー

のホームページを見て臆してしまって参加辞退、急遽なりたてのローバースカウト望月くん(◆印)と鈴木くん(★印)に白羽の矢があたってのチャレンジとなつたのであった。

場所は栃木県小川町から烏山町までの15キロ区間、天候晴れ。雨のアトで水量は若干多めの絶好のコンディションであった。



▲これがその問題の瀬。那珂川では珍しい。

まず、参加した2人のカヌー歴はというと、◆望月くんは生まれて初めての全般的初心者、★鈴木君はベンチャーエイジに2度ほど経験しているとのこと。そのときカヤックから体が抜けなくて溺れかかったという経験を持っている。艇に同乗したM氏はカヌー歴5年、特にカナディアンカヌーではなかなか腕を持っているベテランのカヌーインストです。

さて、チャレンジャーの2人であるが、この晚秋カヌーに参加するにあたつての心構えは…

◆「そのときの心境はというと、僕としては“沈”をするつもりはまったく無ないので、意気揚揚としていました。」
★「最初、自分はこの訓練を舐めてかかっていました。一応、濡れてもいい格好をしてはいましたが、冬もそろそろ本番という11月の下旬に、沈をするなどという無茶を行うハズがないと思いました。」

しかし、目的地に近づくにつれて

◆「車で移動の際に下のほうに見えた場所で、見るからに岩場の切り立った流れがカープしている場所で、本当に不安だった場所の一つ…」

と、だんだんと不安が募ってきたようです。そして出発地点で望月くんは、

◆「初めて川下りをする身、何も知らないで当然とばかりにライフジャケットを裏表逆に着けていました。」「いざ出発という時がやってきました。メンバーは後席鈴木隊員、中席M氏、そして前席に僕が座り漕ぎ出しました。まず最初の難関は、前に進まないということでした。M氏曰く、「『漕がなければ進まない』ということでした。もっともです。」

と不安と焦りで珍事件を繰り返しています。それを見た鈴木くんは

★「しかし、自分が乗った艇の方々の顔ぶれを見たとき、沈の不安が脳裏を横切りました。」

と正直に語っています。さて、こぎ出した彼らを待っていたのは、那珂川では珍しい3級の瀬です。これにはベテラン揃いの一一行も不安を感じたらしくボートエージ(危険箇所を回避して岸に上がりカヌーを引いていくこと)の判断をしたところです。

★「緩やかな流れを横切り、初めての瀬が見えたとき覚悟はきめていました。その瀬というのは、かなりの激流で、カヤックでも下るのは難しそうでした。無論、カナディアンで下るなどというのは明らかな自殺行為です。」

◆「そこに待っていたのは、怒り狂った

大波(そう見える)でした。」しかし彼らの艇は勇敢にもそこに飛び込んでいたのです。

◆「漕ぐスピードとは裏腹に、艇はどんどん激流のほうへ流されるように進んでいました。激流に進入したとき、ものすごい勢いで艇が上下にゆれました。艇が上に上がり、そして下がった時に水がどんどん入り、激流を越えた時には、僕の胸のあたりまで水が入り込んでいました。そして沈没。」

★「瀬に入ったとたん、自分の乗っている船首は大きく跳ねて水面に叩きつけられました。そして、滝のような水しぶきが降り注ぎ、艇の中は見る見るうちに水たまり、もといお風呂状態になっていくでした。」

しかし、後になってその状態を★「自分が瀬の中でどんな顔をしていたか思い返しました。恐怖に引きつづつも、かなり笑顔だったと思います。」

◆「カヌー初体験という意味では今回の体験は盛り沢山で、かなり楽しめました。」

【今回の詳しいレポートは、県連HPのWEB版スカウティング茨城に掲載してあります(編集部)】

君は茨城県連盟の父 佐野瑞治 を知ってるか？①

★ 県指導者養成委員長 吉田俊仁 ★

～これは、茨城県にボーイスカウトを作った佐野瑞治先生の物語である～

今から77年前の1923年(大正12年)のことである。当時薬剤師であった佐野瑞治(さのこうじ)は、文学青年であった。その頃“三島通陽(*1)”という新進の作家(当時は三島章道というペンネームであった)のファンであった。そして、彼が文筆の傍らボーイスカウト運動に力を注いでいることを知り、江幡表と南畠義生という親友と団り、三島通陽に講演の依頼を誰の紹介もなしで手紙で送ったのである(当時この三島通陽という人は少年団日本連盟の副理事長であり、子爵の位にあつた大変偉い人であった)。すると、どうであろう、彼はすぐに返事をよこし「多忙ではありますが、1日くらいは時間を取れますよ。喜んで行きます…。」とのこと。佐野瑞治は「天にも昇る」様な気持ちでこれを読んだのであった。

そして、1923年2月28日肌寒い日、三島通陽は、ボーイスカウトの団員本庄俊輔、柏木真三の2君を連れて笠間駅に降り立つのである。彼らの格好はボーイスカウトの制服に包まれていた。そして、笠間小学校の講堂で三島通陽の恩師、乃木希典大将(のぎまれすけ:学習院長)の家庭のしつけについて述べられた。

さて、三島先生の講演を聴いてボーイスカウトに取り憑かれた佐野瑞治は、早速三島先生に申し上げると「それには小学校の教職員になるのがいちばんの近道だ」と言われ、その年(大正12年)栃木県の下都賀郡部屋尋常高等小学校の教員になるのである。その時の佐野瑞治は薬剤師であった。つまり教職のテストを受け先生になったのである。ボーイスカウトをやりたくて職業を変えてしまったのである。

そして大正14年8月富士山中の野営場で開設されたわが国最初の中央実修所に入所し、佐野常羽所長のもとで10日間の訓練を受けたのである。(つづく)

*1 三島通陽(みしまみちはる)

日本連盟第四代総長。戦後はボーイスカウト再建のために努力する。指導者養成のため、自ら全国を回って指導者講習会を実施。また、栃木県西那須野町に所有の土地家屋を日本連盟に譲渡する。これが現在の那須野営場である。

乃木希典

三 島 通 陽

日本に初めて、ボーイスカウトを紹介したのは、牧野伸顕と北条時敬と、乃木希典(海軍大将)の3人である。

乃木は英国のキッチナー元帥の心の友であった。このキッチナーはまだベーデン-パウエル卿の心の友であったので、こんな関係から、このボーイスカウトの資料写真などが、乃木の手のはいり、深くこれに興味をもった。

これよりさき、乃木は旅順の戦いで、多くの部下を失い、たびたび申し訳ないとしょんぼり凱旋(がいせん)してたとき、明治天皇は、乃木の心を見抜かれたが「乃木、お前はふたりの子を失ってさぞさびしかろうから、たくさんの方をさすけてやろう」と、学習院長を命ぜられた。

乃木は感泣して、自分の家を捨て、学習院の中、高等科を全寮制度とし、自分も寮に泊まりこんで、身をもって範を示す体あたりの生活指導をした。1年生がはいってくると、その夜からまずいつしょにフロにはいり、全生徒の名と性質を覚え、時には母親のように優しく親切で、時には父親のように厳格で質素を旨とし、時にはユーモアもあって、それは楽しい生活指導であった。私はこの時、1年生で指導を受けた。そのひとつの特徴は、美しい助け合いで、級友はみな實に仲が良く、それが老人の今日までつづいているのは、乃木の指導のたまものと、みないまでもいい合っ

ている。

さて、この寮生活で生徒は、カーキ色のボーイスカウトと同じ服(ただしネックチーフと半ズボンはなかったが)を着せられ、これを作業服と呼んだ。それから、乃木はキャンピングをやってみたかった。しかしその頃日本には小さい手頃のテントがなかった。ところが乃木は、旅順の戦利品の中に、かっこうなテントがあったのを思い出し、それを陸軍省から払い下げてもらいあとはそれをまねて作り、夏の片瀬海岸の遊泳の時、やらせた。わが国初の青少年キャンピングである。

いまからみると、実に幼稚なものだったが、大自然と親しみ、自らの生活環境を築き、協力一致と相互扶助の精神で、千变万化の大自然に取り組みつつ、楽しいしつけの生活をしていく青少年キャンピングのよさは十分發揮されていた。

乃木は英王の戴冠(たいかん)式に参列した時も、キッチナーの案内で、スカウトラリーを見学し、パウエル卿とも語り合い、帰朝してからは寮の夜話によくボーイスカウトの話をした。この時の小さな生徒の中から、いま日本のこの運動の中心人物になってい者は10人以上いる。乃木は自分は何をやっても失敗ばかりで申し訳なかつたとついに思い暮らしていたようだが教育家としてはりっぱだつたと教え子は信じている。

【三島通陽「ボーイスカウト十話」(昭40)より抜粋】

コミッショナー通信

県コミッショナー 津久井一茂

新世紀を迎えて

スカウト諸君、指導者の皆さん、あけましておめでとうございます。今年は21世紀の夜明けの年であり、どなたが、ひとしおの思いを込めて越年されたのではないのでしょうか？

この新世紀は、地球上のどの国、どの地域にも等しくやってきました。世界中でボーイスカウト活動に参加している2,900万人の上にも平等にやってきました。世界には政治的、経済的、地域的、環境的に様々な国がありますが、どの国のボーイスカウト運動も、これから世界を担う若者が誠実、勇気、自信及び国際愛と人道主義を把握し、実践できるように成長することを願って活動しています。

ベーデン・パウエル卿(B-P)により20世紀の初頭に始められたこの運動も100年近い歴史のなかで、その時々により華々しく発展し、時には運動の経過を振り返り、その方向を見定めながらも、常にB-Pの基本的理念を確認し、世界的規模での人道主義に基づく青少年育成の成果を上げてきたことは、スカウト運動に関わるすべての人が認めるところでしょう。

21世紀を迎えるにあたって、私たちはこの運動の重要性をあらためて再認識し、さらなる発展に向けて、気を引き締め、それぞれの役割の中で最善の活動を進めていくことが、今まで以上に必要となってくるのではないでしょうか。そのためには、現在私たちを取り巻いている状況の分析と、今後の世の中がどのように変わっていくのかの的確な洞察が重要になります。

昨年8月に、ボーイスカウト日本連盟も協力して総務省(本年1月6日からは総務省)が主催とした高校生全体の「第1回全国ユースフォーラム」が開催されました。これにはベンチャースカウトも企画の段階から参加し『未来をつくるコミュニケーション～今、私たちの能力(パワー)が試される～』をテーマに「間近に迫った21世紀を自分たちはどのような時代にしていくことができるだろうか。どんな夢や希望をもっているか。」「自分たちの身近な家庭・学校・地域社会でこれまで築かれてきた習慣やシステムを見直し、より良い未来を作るために、今どの様な取り組みが必要なのか。」「社会の諸問題に目を向け、自分には何ができるか、何をすべきか、何を考えなければいけないのか、同世代の仲間にどう働きかけるのか。」等の議論を通じ自発的、具体的な行動計画が作られたと報告されています。

また、昨年夏に開催されたベンチャーワークス大会の地球開発村でのプログラムでは、今、地球上で起こっているいろいろなことを学び、その活動から参加者によるリレー討議により「ベンチャー平和宣言」をまとめ、さらにユネスコの提唱による「わたしの平和宣言」の署名活動が行われました。

2001年は、国際連合が定めた「国際ボランティア年」です。“地球の仲間とともに”のスローガンのもと、今年度も国際理解・国際協力プログラムの推進を重要課題として取り組んでいきます。今年度の日本連盟主催の「バンഗラ

デイシユORT健康啓蒙プロジェクト派遣計画」に茨城県連盟のローバースカウトの参加申込もあり、うれしく思っています。

時代を担う若者が、世界的視野に立って、また21世紀を生きる人間として、平和に関心を持ち、平和を考え、平和に向けて行動できるよう成長することを促すため、役割の違いを問わず、すべての指導者一人ひとりが、今一度「誰のためのスカウティングか？」「何のためのスカウティングか？」を考え、昨年の第35回世界スカウト会議で採択された世界スカウト機構の「スカウト運動の使命声明」を理解して行動し、スカウト達を支援することがきわめて重要と考えます。

2002年からの「学校週5日制」や年間100時間に及ぶ「総合学習の時間」の制定も21世紀を背負う青少年の「心のゆとりを育む」ことをねらいとして導入されたものであり、その活用について、学校がボーイスカウトなどの社会教育団体との協働に期待をかけてきているところです。

スカウト諸君、指導者の皆さん、このような私たちを取り巻く環境の変化に前向き捉え、スカウト運動への関わりを通して、幸福なそして意義ある人生をおくるため、共に頑張って参りましょう。

◆スカウト運動の使命声明

スカウティングの使命は

スカウトの「ちかい」と「あきて」に基づいた価値観と教育体系を通して、「人々が個人としての資質を發揮し、社会において積極的な役割を果たすことができる、より良き世界を築くことに役立つよう」青少年の教育に貢献することにあります。

この使命は

- ・青少年をその成長段階にある期間を通じてノン・フォーマル教育課程に与えること
- ・青少年が自己を信頼でき、協力的で、責任感があり、明確な態度を持った人間として成長するにあたって、ひとりひとりを重要な役割を持つ者に育て得る特有の方法を用いること
- ・スカウトの「ちかい」と「あきて」に示されている、精神的、社会的、かつ個人的な原則に基づいた価値観を醸成する体系を確立するように青少年を支援すること

によって達成されます。

(— 1999年第35回世界スカウト会議決議 —)

★トレーニング・インフォメーション WOOD BADGE

●指導者講習会のお知らせ

3月18日 第4地区・千代田町中央公民館(受付中)



●ウッドバッジ研修所のお知らせ

ビーバースカウト課程・茨城第10期

10月5日(金)~8日(月)水戸市内(予定)

カブスカウト課程・茨城第29期

5月3日(木)~6日(日)土浦青少年の家

ボーイスカウト課程・茨城第27期

10月5日(金)~8日(月)土浦青少年の家(予定)

ベンチャースカウト課程・茨城第4期

5月3日(木)~6日(日)土浦青少年の家

WB研修所BVS過程茨城第9期 11月2日~5日

大洗こどもの城 八木健二所長 参加者13名



★SC茨城 スカウトくいづ「まちがいさかし5(ファイブ)」



前回はちょっと難しかったかな? 応募に対する正解率は75%でした。そして、厳正なる抽選(12月の理事会の席で抽選)の結果、次の5名が当選しました。

- 神栖第1団 カブ隊 篠塚 龍馬くん
- 取手第2団 ボーイ隊 堀江 亮くん
- 水戸第6団 ベンチャー隊 岡野 聖くん
- 阿見第1団 ボーイ隊 高橋愛友美さん
- つくば第1団 ビーバー隊 三宅 時生くん

さて、今回も5つの間違いがあります。今回は前回よりもちいーと難しいかな? 微妙な色の違いまで見極めてくださいねー。正解が解った人は、右の太い枠の方をコピーして(切ってはいかんぞ、切っては!!)官製はがきに貼って、赤鉛筆で間違っているところを○で囲んで、

①所属団隊 ②住所 ③氏名 ④電話番号 ⑤スカウティング茨城の感想

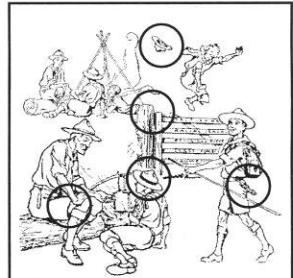
を書いて、下記宛に送ってください。正解スカウトの中から抽選で5名に素晴らしい賞品をお送りします。

(〆切は、平成13年4月1日、当日消印有効です。)

●前回の正解

上から

- ①ジャンプスカウトの帽子
- ②三脚のあし
- ③歩行スカウトのナイフ
- ④寝ころぶスカウトのハツとのベルト
- ⑤B-Pのズボンのしわ



◆編集後記

新世紀あけましておめでとうございます。旧年中はスカウティング茨城をご愛読頂き、ありがとうございました。今世紀も皆様に好かれる誌面作りを心がけ、いろいろな情報を提供いたしたいと考えてありますので、よろしくお願ひいたします。寒い冬を楽しんでますか? 今号の冬特集を読んでもっと楽しんでいただければと思います。さて、次号の予告ですが、今年は県連創立50周年でしかも県キャンポリーの年です。…ということはもちろん「50周年記念事業県キャンポリーのすべて」と題してお送りします。おたのしみに!!

広報委員長

発行日 平成13年1月31日